

研究論文

岩手県三陸町における野生シカとその被害に対する住民意識

細川吉晴

宮崎大学農学部森林緑地環境科学科

(2012年12月26日 受理)

Residents' attitudes against the damage to the crops by wild deer in Sanriku town, Iwate Prefecture

Yoshiharu HOSOKAWA

Department of Forest and Environmental Sciences, Faculty of Agriculture, University of Miyazaki

Summary : Residents' attitudes against the damage to agricultural crops by wild deer in Sanriku town, Iwate Prefecture, were investigated by a questionnaire to 100 testee. Many of agriculture, forest and fishery testee had the experience damaging their crops directly by wild deer, and they hoped that wild deer should not habit in the town, because the damage of their crops was actually very serious. In case of the harmful extermination of wild deer, 48% of the testee supported totally after counting the actual wild deer habitat, and 30% supported the positive harmful extermination by shooting, and then totally about 80% supported the harmful extermination of wild deer. Almost of the testee knew already the deer farm for wild deer. Many of them also thought to cooperate for rural revitalization by the effective utilization of wild deer, because Sanriku town had only the primary industries of agriculture, forestry and fishery.

Furthermore, some cases of rural revitalization by the effective utilization of wild deer were described.

Key words : Wild deer, Agricultural crops damage, Residents' attitude, Deer farm.

緒言

野生動物による農作物の被害が全国各地で生じており、その被害金額も多額に上っていて、極めて深刻になってきている(農林水産省生産局農業生産支援課鳥獣被害対策室 2012)。鳥獣類によるその被害を全国都道府県別にみると、東日本では長野県や新潟県にその被害が多くみられ、その被害をもたらす主要な動物はカラス、スズメ、シカの順で多く、その他にサル、イノシシなどがある(細川ら 1999)。とりわけ、ホンシュウジカ(*Cervus Nippon centralis*, 以降、野生シカという)

の生息範囲の北限と言われている岩手県の五葉山周辺では、そのシカによる農林業作物の被害は年々増加しており、1990年度の被害額は農業関係が61.4千万円、林業関係が28.7千万円、合計額が34.8千万円にも上っていた。その当時の被害農作物は牧草、水稻、豆類、野菜類、桑、椎茸とさまざまであるが、中でも牧草の被害額が最も高く農業関係被害額の約33%を占めたほか、被害額の増加が顕著なものは椎茸で被害額の25%にも上った。岩手県では毎年、シカ特別対策事業として1億円以上をかけて防護柵を設けたり忌避剤を散布した

り、生息数の調査などを行なってきた。一方、三陸町（大船渡市に2001年に編入された）では食害を引き起こす野生ジカを捕獲区域に設置したネットフェンスや捕獲ゲートなどにより捕獲した（細川 2011）。また、捕獲した野生ジカを有用資源として活用し地域活性化を図るための飼養施設を建設し、いわゆるシカ牧場を1992年に開設した（細川 2012）。しかしながら、その後、シカ生産物の販売などが行き詰まったことも影響して1998年ころに閉鎖した経緯がある。

本報は、シカ牧場のあり方などについて三陸町住民100名に対して意識調査を行なった結果を取りまとめたものである。この調査時は、ちょうどシカ飼養施設の建設中の頃である（1992年）。意識調査の内容は、農作物被害を直接的に受けている事態を住民としてどのように感じているのか、その被害にどう対処したらよいか、また、今後どのような対策を取るべきかなどについて整理したものである。

2012年度の岩手県のホームページをみると、野生ジカの生息範囲が五葉山周辺から北東方向へ広範囲に広がっている現状が報告されている（岩手県 2012）。岩手県では野生ジカ対策を講じてきたにもかかわらず、その頭数は減るどころか生息地の拡大と北上化が生じている。同時に、農業被害等の拡大はもちろん、自然公園等における希少植物等への影響なども懸念される。特に、三陸町周辺ではシカ牧場の閉鎖後に野生ジカ対策が講じられてきたにも関わらず、その頭数増加と相まって生息地拡大が進んだ。その原因には山村から里山における耕作放棄地の拡大や近年の少雪化の影響も挙げられるが、繁殖力の高い野生ジカに対する策には限度があったことが想定される。ここで、農業被害を直接的に受けている三陸町の野生ジカに対する住民意識をまとめるにはいささか古いかもしれないが、全国的に野生動物が里山から市街地まで押し寄せてきている昨今、とりわけ野生ジカ対策を考えている各地の参考事例となる意義は大きいと考えた。

方法

アンケート調査は、岩手県三陸町における越喜来、綾里および吉浜の3地区に在住する20～80歳までの100名を対象に行なった。その方法は、各

地区内で無作為に戸別訪問を行ない、アンケート用紙を配布し、あとで回収する配票調査法である。質問内容は、以下に示す10項目であるが、質問8～10は意見を書きとめてもらうことにした。

「アンケート調査：野生ジカに対する三陸町民の意識調査」

質問1：あなたにとって野生ジカの存在とは？

- a. いなくてもよい
- b. 今より少なくてもよい
- c. 今のままでよい

d. その他（具体的に記載： ）

質問2：あなたは実際に野生ジカの被害を受けていますか？

- a. はい（被害あり）
- b. いいえ（被害なし）

c. その他（具体的に： ）

質問3：シカの農作物への被害をどう考えますか？

- a. 深刻な問題なので今すぐ手を打った方がよい、
- b. シカの生息空間が少ないので仕方がない

c. その他（具体的に： ）

d. わからない

質問4：有害駆除としてのシカの射殺をどう考えますか？

- a. 進んで行なうべきだ
- b. 行なうべきではない
- c. 現存頭数を把握してから行なうべきだ

d. わからない

質問5：現在、シカに限らず野生動物の生息範囲が人間の生産活動等によって狭められていますが、そのことについて、どうお考えですか？

- a. 仕方がないと思う
- b. 保護すべきだと思う

c. その他（具体的に： ）

d. わからない

質問6：夏虫山に有害駆除と地域活性化を目的としたシカ牧場があることを知っていますか？

- a. はい
- b. いいえ

c. その他（具体的に： ）

質問7：害獣を有効的に利用して地域の活性化に役立てようという計画に積極的に協力して行きたいと思いませんか？

- a. はい
- b. いいえ

質問8：野生動物との共存という問題について、保護、駆除の両面からのご意見を聞かせて下さい。

a. 保護（具体的に： ）

b. 駆除（具体的に： ）

質問9：あなたが考える具体的なシカの対策法がありましたら、是非お答えください

(具体的に：)

質問10：三陸町シカ牧場とそれに隣接するリゾート施設が建設されましたが、今、実際に気になっている点や疑問に思っている点、意見等がありましたらお書き下さい。

(具体的に：)

最後に、「属性」として以下に回答ください。

性別：男・女 (○で囲む)

年齢：(具体的に：) 歳

職業：(具体的に：)

以上の内容について回答していただいた。アンケートの集計において、女性層が非常に少なかったため性別で整理しなかった。また、学生(地区内にK大学水産学部がある)や主婦は調査依頼に伺っても不在が多く、その回答数も少なかったため、両者を合体して「学生・主婦」と表して整理した。さらに、選択肢のないものについてはその回答をおおまかなカテゴリーに分けて整理した。

結果および考察

1. 回答者の属性

回答者の属性を、職業別・年齢別に表1に示した。職業別では、会社員が20%と最も多く、次に公務員が19%、自営業が16%と続いた。シカ被害に関係が深いと思われる農業、林業はそれぞれ10%、4%と少なかった。農・漁協は8%、水産業

は5%、学生・主婦が9%、教員が7%となり、無回答は2%であった。また、年齢区分では、20~30歳(以下、20代と呼ぶ)が18%、31~40歳(同30代)が19%、41~50歳(同40代)が21%、51~60歳(同50代)は18%、61~70歳(同60代)が14%で、14~21%の範囲であったが、71~80歳(同70代)は6%と少なく、無回答者は4%であった。

職業別の年齢層では、農業は50代が50%と半数を占めており、60代が30%、30代と70代がそれぞれ10%であり、高齢者層が比較的多かった。林業では20代が50%と多く、60代と70代がそれぞれ25%、また、水産業は60代が60%と半分以上を占め、次に50代が40%で高齢者が占めた。自営業では、40代が31%、50代が25%、60代と70代がそれぞれ19%、30代は6%を占め、中年層~高齢者層が比較的多かった。公務員は40代が42%、50代が21%、20代と30代が16%、60代は5%となり、中年層が多かった。教員は20代と40代が43%、50代が14%で若年層と中年層で占められた。また、会社員では30代が55%と中年層が半数以上を占め、20代、40代、50代および60代がそれぞれ10%ずつであった。農協・漁協は、40代が38%、20代と30代がそれぞれ25%ずつで若年層と中年層が多くを占めた。学生・主婦では、20代が56%となり学生主体の若年者層の割合が多かった。

以上のことから、回答者の属性の特徴として、農・林業および水産業は高齢者層、自営業、公務員、教員、会社員および農協・漁協は中年層、学

表1 回答者の職業・年齢別属性

職業区分	年齢(歳)区分							無回答	合計 (人・%)
	20~30	31~40	41~50	51~60	61~70	71~80			
農業	0	1	0	5	3	1	0	10 (10.0)	
林業	2	0	0	0	1	1	0	4 (4.0)	
水産業	0	0	0	2	3	0	0	5 (5.0)	
自営業	0	1	5	4	3	3	0	16 (16.0)	
公務員	3	3	8	4	1	0	0	19 (19.0)	
教員	3	0	3	1	0	0	0	7 (7.0)	
会社員	2	11	2	2	2	0	1	20 (20.0)	
農・漁協	2	2	3	0	0	0	1	8 (8.0)	
学生・主婦	5	1	0	0	1	1	1	9 (9.0)	
無回答	1	0	0	0	0	0	1	2 (2.0)	
合計 (人) (%)	18 (18.0)	19 (19.0)	21 (21.0)	18 (18.0)	14 (14.0)	6 (6.0)	4 (4.0)	100 (100.0)	

生・主婦は若年者層が多かった。

2. 野生ジカの存在

質問1に対する職業・年齢別回答の結果を、図1に示した。全体では「野生ジカは今より少なくてよい」が49%と最も多く、「いなくてもよい」と「今のままでよい」がそれぞれ25%、23%であった。「その他」が3%で、その意見として、「保護は必要だが、今より少ない方が適正かどうかはわからない」などがあつた。

職業別にみると、「いなくてもよい」は農業が70%と多く、次いで水産業が60%、林業が50%であった。「今より少なくてよい」は、教員が71%、公務員が68%、林業、自営業および農・漁協がいずれも50%を占めた。また、「今のままでよい」は学生・主婦が56%、会社員が30%、教員が29%であった。

年齢別にみると、「いなくてもよい」は60代が50%と多く、その他の年代は20%前後であった。「今より少なくてよい」は、40代および70代がそれぞれ67%と多く、次いで60代が50%、その他の年代は40%前後を占めた。また、「今のままでよい」は20代が39%、30代が32%、50代が28%、その他の年代は20%前後であった。年齢層は職業との対応が強く、高齢者層の大半が農・林業および水産業の中心であるためにシカの存在は深刻なものである一方、中年層や若年者層はシカの被害への危機感が少なかった。

以上のことから、農林水産業の人たちは、シカの被害を直接受けていることもあり、シカの存在を拒否する選択肢に集中した。一方、シカによる

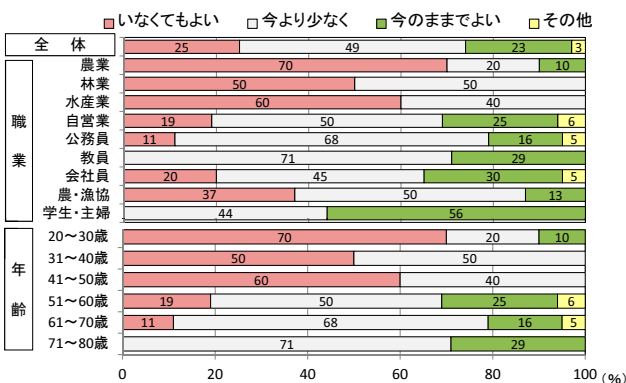


図1 質問1 (野生ジカの存在とは) への職業・年齢別回答結果

被害との関係が比較的薄い自営業や公務員、教員、会社員および学生・主婦では、「今のままでよい」を多く選択している。このように職業別に野生シカの存在に対する意識が分かれることになった。

3. 野生ジカによる被害

実際に野生シカの被害を受けたことがあるかの回答をまとめたものが、図2である。全体として、「はい (被害あり)」が51%、「いいえ (被害なし)」が48%とほぼ同数であった。その内訳として、職業別では、「はい」は農業が90%、水産業が80%、林業が75%と高い割合を示したのに対して、「いいえ」では会社員が85%、教員が71%、学生・主婦が56%と続いた。

年齢別では、「はい」は60代が71%、70代が67%、20代および50代が56%を占めた。「いいえ」では30代が79%と多く、40代が52%であった。ほとんどの年代層がシカによる被害を体験していたが、総じて41代以上の年齢層が多かった。

農業や林業では、「はい」の割合が「いいえ」よりも顕著に多かったことから、シカの被害は農作物や森林などに及んでいるといえる。また、水産業にも「はい」が多く、同時に自営業や公務員でも「はい」の割合が多かったのは、彼らは兼業農家であり、自分の農地における被害が発生しているためである。農林水産業に就いている年配層に野生シカ被害の多いのは、職場で実体験があるほか自給自足のための耕地や林地を所有するためであろう。

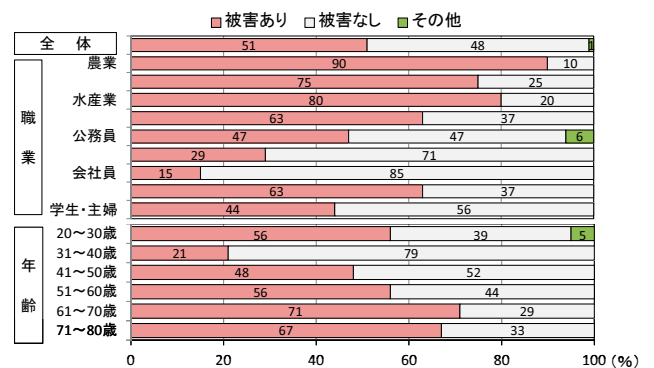


図2 質問2 (野生ジカの被害の有無) への職業・年齢別回答結果

4. 農作物への被害対策

シカの農作物被害への対策についての回答をまとめたものが、図3である。「深刻な問題なので、今すぐ手を打った方が良い」は、66%と最も多く、次に「シカの生息区間が少ないので、仕方がない」が18%、「わからない」が10%、「その他」および「無回答」が3%ずつとなった。「その他」に記載された内容は、「開発などにより緑が減り、シカが農作物を荒らすようになるのは当たり前、国単位で対策すべきだ」という意見や、「山全体の環境をどう適正化していくかが問題だ」などがあった。いずれにしても、多くの人々がシカによる農作物への被害は深刻な問題であることを受け止めていた。この被害が「深刻な問題」と考える人は林業が100%、農業および水産業が80%を占めたが、「仕方がない」は教員が57%、学生・主婦が33%、会社員が25%であった。シカの被害とは直接関係がない職業の人たちは、シカの被害を直接受けている人たちより、「シカの被害は深刻」と感じている割合が低かった。

年齢別にみると、「深刻な問題」と考える人は60代が86%と最も多く、次いで40代が76%、50代が67%を占めた。「仕方がない」は70代が33%、20代が28%、30代が26%であった。高齢者層の中にはシカの被害を「深刻な問題」と考える人とは、「仕方がない」とあきらめている人がいた。中年層と若年層はシカの被害を「深刻な問題」と考える人が比較的多かった。また、「わからない」と答えた人がすべての年代に10%程度いた。

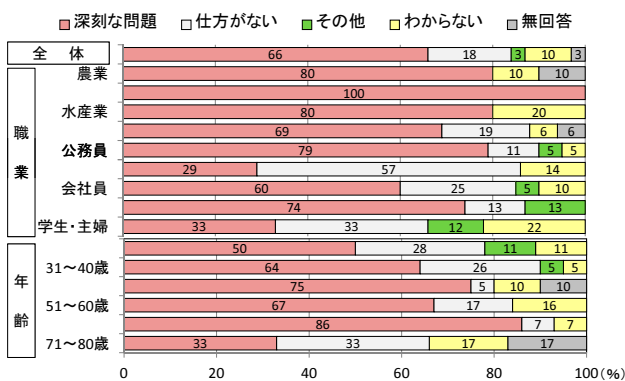


図3 質問3（農作物への被害について）への職業・年齢別回答結果

5. 有害駆除に対する考え方

有害駆除としてのシカの射殺をどう考えるかについての回答をまとめたものが、図4である。全体としては、「現存頭数を把握してから行なうべきだ」が48%と最も多く、「進んで行なうべきだ」が31%であった。また、「わからない」と「行なわない」がそれぞれ14%、6%であり比較的少なかった。したがって、現存頭数を把握しつつ有害駆除としてシカを射殺することに賛成する人は約80%を占めていることになる。

また、職業別にみると、「進んで行なう」は、農業および水産業が80%を占め、林業が50%であった。「現存頭数の把握」は、教員が86%、学生・主婦が78%、農・漁協が63%を占めた。年齢別では、「進んで行なう」は60代が86%と最も多く、次いで50代が39%、70代が33%であった。「現存頭数の把握」は、20代が72%と多く、次に30代が53%、50代および70代がそれぞれ50%を占めた。

以上のことから、農家ではシカの被害が本当に深刻な状況であること、直接被害にあっていない人たちがさえ射殺賛成が多数派であることが判明した。また、ほとんどの年代の人たちが、有害駆除は現存頭数を把握してから行なうべきだと考えていた。

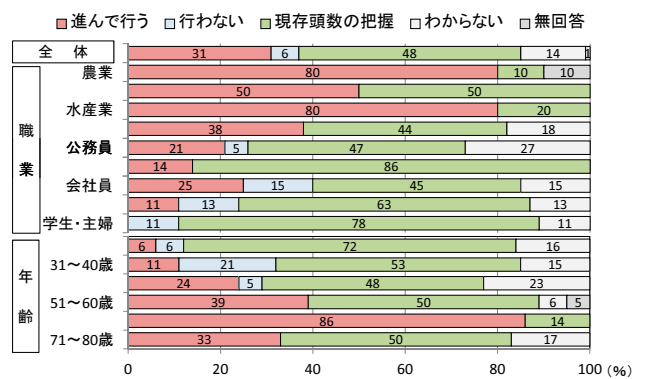


図4 質問4（シカの有害駆除（射殺）について）への職業・年齢別回答結果

6. 野生動物の生息範囲

野生動物の生息範囲が人間の活動に狭められていることについての回答をまとめたものが、図5である。「保護すべきだ」が45%、「仕方がない」が37%、「その他」が9%、「わからない」が8%であった。「その他」の意見には、「頭数の調整が

必要」や「シカ以外は保護してもいい」などがあった。「保護すべき」は、学生・主婦が67%、公務員が58%、農業および林業が50%を占めた。また、「仕方がない」は水産業が80%、農業が50%、会社員が40%であった。「その他」の意見があったのは教員が29%、農・漁協が25%となった。

以上のことから、農家の人たちが必ずしも野生動物のすべてを批判的に見ているのではなく、被害を加える動物を駆除して欲しいと思っていて、それ以外は保護すべきであると考えている人が多かった。換言すると、農作物被害にはあっているが、決して野生シカを否定しているのではなく、半数近くの人たちがその保護の意識も持ち合わせていることがわかる。

年齢別にみると、「保護すべき」は50代が61%、20代が50%、40代が48%を占めた。また、「仕方がない」は60代が64%、70代が50%、その他の年代は30%前後であった。高齢者の多くは「仕方がない」と考えていたが、中年および若年者の多くは「保護すべき」と考えており、高齢になるほど有害獣を駆除してほしいと思っていた。

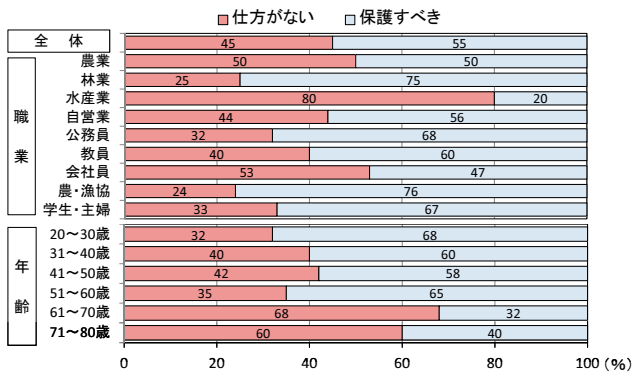


図5 質問5 (野生動物の生息範囲が狭められている) への職業・年齢別回答結果

7. シカ牧場の存在

夏虫山に有害駆除と地域活性を目的としたシカ牧場がある (建設中) ことについての回答をまとめたものが、図6である。全体的には、97%の人が「知っている」と回答した。一方、シカ牧場の存在を「知らない」のは「公務員」の1名の1%であり、「その他」が「自営業」と「農・漁協」の1名ずつの2%であった。ただ、「その他」には「有害駆除と地域活性ではなく、ただの税金の

無駄使いだ」などとシカ牧場に批判的な意見があったことから、実際にはシカ牧場の存在認識はこの2名にあったものと思われる。このように、三陸町において、シカ牧場があることの認知は十分に浸透していると判断された。

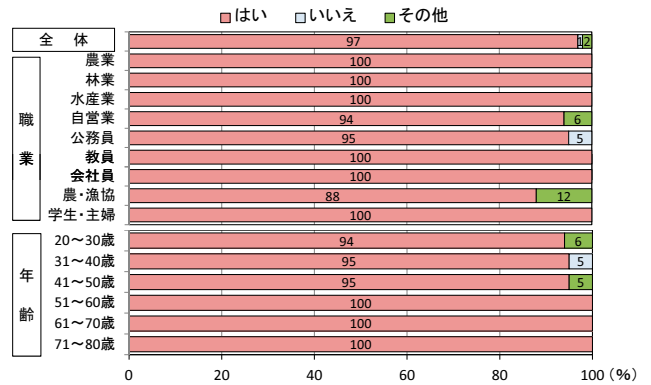


図6 質問6 (シカ牧場を知っている) への職業・年齢別回答結果

8. 地域活性への協力体制

害獣を有効的に利用して地域の活性化に役立てようという計画に、積極的に協力するかどうかについてまとめたものが、図7である。全体としてみると、「協力したい」が72%、「協力したくない」が28%であった。職業別にみると、「協力したい」は会社員が84%、農業が78%、自営業および会社員が75%を占めたが、「協力したくない」は公務員が60%と多く、次に林業が50%、水産業が40%と続いた。会社員や農業、自営業、会社員の多くが「協力したい」と回答した点は、このような計画は町の事業であるので当然と思える。一方、

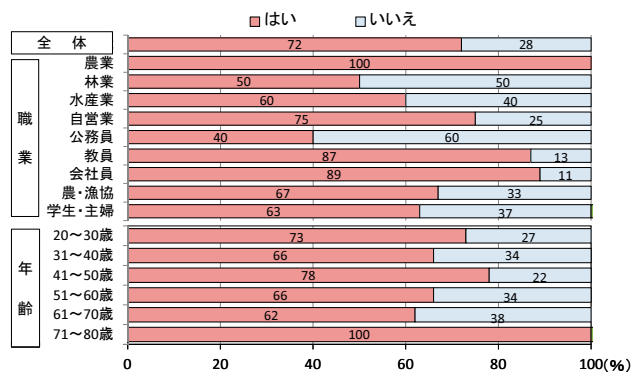


図7 質問7 (野生シカの有効利用による地域活性化に協力) への職業・年齢別回答結果

「協力したくない」と答えた人が6割もいた。農家の中には「農家への補助金が足りないのに、他の計画を実施することに疑問がある」という意見があった。

年齢別に見ると、「協力したい」は70代が100%と最も多く、次いで40代が78%、他の年代は60%前後を占めた。高齢者は協力に意欲的な人が多いことがわかる。

9. 野生動物との共存

質問8に対して記載のあった意見などを、「保護」や「駆除」、「その他」に分けて取りまとめた。

(1) 保護

「保護についての意見としては、「自然や生態系を破壊しないように自然林の保護と拡大を促進する」、「自然な形で適正頭数を保護する。その際、人間と動物の生活領域をはっきりと区別し、野生動物による被害が農林業に出ないように柵などで防ぎ、野生動物の生活空間を広げる」などの意見があった。しかし、野生シカによる被害等が出ている現状では、保護だけを訴えることは難しく、駆除しつつ適正頭数を維持することや、柵などによって農作物の食害を防ぐ方法が望ましいという意見に集約できた。

(2) 駆除

野生シカの頭数が増加するにつれて、森林や植林の被害が多くなるので、シカの駆除が必要となる。その駆除は「現状の頭数を把握してから行なうべきであり、適正頭数だけを保護して絶滅しない程度に行なうべきである」、「保護区外のシカについては時期を問わず捕獲し、被害を起こすシカだけ駆除する」、「三陸町第三セクター「ふるさと振興株」(通称、サンプル)との話し合いで食用化などを進め、有効に用いるために駆除する」という意見があった。一方、「駆除には反対で自然の摂理に任せたい」、「殺すのではなく捕獲などの別の方法を取るべきだ」というように、殺処分や捕獲ではなく自然に任せるべきといった意見があった。

(3) その他

「シカ被害の実態を知らないため、野生動物を保護することが良いことだと一概には言いきれない」、「行政に任せる」、「野生動物との共存については考えたことがない」という意見もあった。

10. 具体的なシカ対策法

質問9に対して記載のあった意見などを取りまとめた。

シカ対策についての意見では、「シカは雌雄関係なく適正頭数まで駆除する」、「完全な防除金網や電気柵や高いフェンスを張って、シカの生息スペースを分離する」、「冬期に指定地区へ追い込む」、「シカ牧場を拡大し、シカの家畜化を進める」など多く挙げられた。その他には、「具体的には特に考えていない」、「行政が取り組めばいい」、「考えたり意見を言ったりする機会がない」、「人を減らすしかない」、「国有林で飼育すればいい」などがあった。しかし、無回答が59人と非常に多く、実際には被害で困ってはいても、その対策についてはあまり考えていない状況かもしれない。

11. シカ牧場とリゾート施設の建設

質問10に対して記載のあった意見などを、カテゴリ別に取りまとめて整理した。

(1) 開発面

シカ牧場を柱にしたリゾート開発については、「山の姿を変えずに、自然保護を重点に置いた施設の利用を考えてほしいが、観光だけの目的によってシカや人間の生活に影響を及ぼす開発は賛成できない」という意見があった。一方で、「長期的にみると開発は心配であるため、リゾート施設には賛成できない」という反対意見があった。

総じてアンケート用紙に記載する回答方式では、その数がごく限られているが、自然保護を基本とするにしても、リゾート施設は開発優先だから賛成できないと考えている意見に集約された。

(2) シカ牧場

シカ牧場については、「シカ牧場で飼われているシカは食肉用だと思えばかわいそうで見学に行けないし、狭い中での多数の飼育では病気が心配」、「町が被害対策には積極的ではないのに牧場を造ることは疑問に思う」という意見や、「シカ牧場を町の活性化に結びつけ、野生動物との共存共栄を目指したい」という意見もある一方で、「シカ牧場に関しては、まずシカの被害をなくすことを先に取り組んでから」と考えている人もいた。

(3) 経営面・公害面

経営面・公害面については、「営利主義ではうまくいかないと思われるので、来訪者(観光客)

の確保が順調になるような営業を望み、また町の独断で進めてほしくない」という意見があった。また、「シカ牧場やリゾート施設は山手で上流地域にあるので、牧場、宿泊施設および屠殺処理場からの廃棄物や排水による飲料水などの水質汚染や、観光客のゴミの投げ捨てなどが心配される」と思っている人もいた。

(4) 将来性

シカ牧場やリゾート施設については、「シカ牧場やリゾート施設がどの程度地域に役立っているのか、どのようなメリットがあるのか疑問であり、これらの将来性と町内の民宿や旅館への影響が心配」、「町の財政負担になり兼ねないので、これ以上お金を掛けないでほしい」という意見があった。一方では、「もう少し研究してから全国的にPRできるようなリゾート計画を進めてほしい」という意見もあった。将来性については、「リゾート施設を造ったはいいが、これからの維持管理に疑問や不安を感じている」という意見もあった。

その他には、「行ったことがないので分からない」、「リゾート施設が建設されたので仕方がない」などの意見があった。

12. 総合考察

(1) 野生ジカやその被害に対する住民意識

農林水産業の人たちは、野生ジカによって農作物被害を直接受けていることもあり、シカはいなくてもよいと多くは考えているが、シカによる被害との関係が比較的薄い自営業や公務員、教員、会社員および学生・主婦層は「今のままでよい」を多く選択し、職業別に野生シカの存在意義が分かれることになった。中には、水産業や自営業、公務員でもシカの被害があると比較的多く回答したのは、自給用も含めて作物を栽培しているためである。この被害を「深刻な問題」と考える人は林業や農業および水産業がかなり多くを占めたが、「仕方がない」の回答はシカの被害とは直接関係がない職業の人たちに多かった。これを受けて、野生ジカの有害駆除は全体としては、「現存頭数を把握してから行なうべきだ」が48%と最も多く、「進んで行なうべきだ」が31%で、現存頭数を把握しながら有害駆除としてシカを射殺することに賛成する人は約80%を占めたことになる。さらに野生動物の生息範囲が狭められていることに対す

る意識では、全体として「仕方がない」が45%、「保護すべき」が55%であり、職業別に特徴的分布はないものの、61歳以上の高齢者ほど「仕方がない」と回答した。その有害駆除と保護機能も含めたシカ牧場がすでにあることは町民の大半が知っていたが、シカの有効利用と地域活性化には、全体として約70%が協力したいと回答した。

以上のことから、野生ジカによる農作物被害が三陸町では多い実態であるので、その対策として有害駆除を優先的に考えてはいるものの、現存頭数をまず把握した上で進めるべきだという意見が約半数あった。そのためシカ牧場は有害駆除や保護の両方の機能を持たせるために建設されたが、三陸町が水産業と農業が主体な産業である以上、シカの有効利用によって地域活性化が図られることに協力する町民が約70%はいたことになる。

実際にこの地域の住民の多くは、農業や水産業の町である以上、先の生活に一抹の不安を感じていたと思われる。農林水産業に係わる者だけでなくサラリーマンの多くも、野生ジカによって自宅の裏庭で栽培している自給的な農作物でさえ被害にあっている。奥山に生息している野生ジカは捕獲施設と飼養施設で地域活性化につなげていけるが、町民の生活圏に近い林内に生息する「里ジカ」は、写真1に示すように、我が物顔で走り回っている。こうした里ジカほど人馴れして農作物被害を多くさせていて、逆に捕獲が難しいと言われている。

野生ジカの駆除は、現存頭数を把握してから適正頭数を間引くべきであると大半の町民は考えている。頭数を把握せずに駆除だけ行なうと乱獲と絶滅を招く恐れがあるとの意見もあった。ただ、



写真1 人里に近い林の中で見かけた里ジカ

こうした状況を全ての住民が理解しているわけではないが、少なくともシカによる農作物被害の問題を深刻に考えている人は多かった。どうも町民の多くがここで駆除対象と考えているのは、住民生活圏に出没して農作物被害を出す里ジカの駆除を望んでいるようであった。しかし、そうはいつでもこれら野生ジカ対策を自分で行なおうとする人は少なく、むしろ行政に任せるとする町民も多くいたが、地域活性化に協力して取りくむ意識を持つ人は住民の7割と多かった。さらに、シカの被害が減らない中で、他の施設の建設などに資金を使うことを批判する人もいたけれども、害獣を有効利用して地域活性化に役立てようという三陸町の考え方や姿勢に、町民がもう少し理解を示してもよさそうなものである。

こうした背景には、前述したように、三陸町が海と山に挟まれた地形的不利地の中で一次産業でしか成り立っていないことが挙げられる。また、行政・町側は、シカ被害対策についての住民の疑問点や被害者の状況を把握し、奥山だけでなく里にも生息するシカの被害をできるだけ低減する対策を講ずることは重要である。

(2) 野生ジカの有効活用の取組について

野生ジカ被害が特に問題となっているが、全国各地で捕獲ジカの有効活用に取り組んだ例を以下に列挙する。この事例の一部は前報で紹介していた(細川 2012)ので、それ以外について論じる。

南羽(1995)の報告では、三陸町のサンプルが事業展開するなかで、鹿肉やハム・ソーセージのほかに、1995年に高級健康食品「鹿麗」の販売も始めた。「鹿麗」は、シカ牧場にいるシカから採取した袋角(ふくろづの)を粉末にしてカプセルに収めたもので、アミノ酸を多く含み疲労回復に効果があり、漢方薬の「鹿茸(ろくじょう)」より優れた健康食品であるとして1箱60カプセル入り18,000円で販売されていた。しかし、この事業は1998年ころ止めてしまった(細川 2012)。また、熊本県水上村(1998)では、シカによる森林被害が深刻化したため、1998年に有害駆除で捕獲したシカを買い上げ、ハムやソーセージなどの加工品を開発した。自然林の伐採で野生ジカの餌場がなくなったことなどからシカの森林被害が増加したことが背景である。以前から駆除には、県・村・森林組合が1頭につき合計6,500円の助成を行なっ

ていたが、その効果が一向に上がらないため、これとは別に村が10,000円を上乘せし駆除の効果促進を図るとともに、駆除されたシカ肉の利用方法として村の特産物にと期待を込めて加工品を開発した。また、熊本県水俣市のSさんは、1994年からダマシカのシカ牧場を始め、今後の計画として、近くの温泉と提携してシカ肉を主体とした食事を提供したり子供たちがシカと遊べる牧場にして地域振興に役立て、高齢化等に悩む中山間地域の農家に「新しい農業経営のスタイルを提言したい」と取り組んだ(坂本 1995)。

また、最近の状況として、エゾシカ協会は、2006年10月に北海道庁が策定・公表した「エゾシカ有効活用のガイドライン」をWeb上に掲載した(エゾシカ協会 2006)。その後、2005年2月にニュージーランドの養鹿事情を調査し「エゾシカ有効活用等調査団調査概要版」としてWeb上に報告し、北海道各地でエゾシカの有効北海道におけるエゾシカ対策に取り組んできている(エゾシカ協会 2012)。さらに、エゾシカ食肉事業協同組合(2012)は、北海道内のエゾシカを食べられる飲食店をWeb上で紹介している。さらにまた、九州山地の森林内では、野生ジカによる森林被害対策として、くくりワナや箱ワナ(九州森林管理局 2012)、囲いワナ(北岡ら 2011)等で捕獲しているが、その場で殺処分して土中に埋設する方法をとっている。筆者は2012年1月に九州森林管理局の野生ジカの捕獲業務検討会で「シカ捕獲と自然の恵みをどう生かすか」と題して講演し、捕獲ジカを高級食肉などとして有効活用することを本気で模索しなければ、野生ジカの増加に歯止めがかからないことを指摘した(熊本日日新聞 2012)。捕獲にとどまらず、シカ肉の加工・流通・商品開発等を、先進地を例として、地域連携で一層推進する必要があると言える。

要約

岩手県三陸町の100名を対象に、野生ジカによる農作物被害対策などに関して、アンケート調査を行なった。その結果、農林水産業の人たちの多くは、野生ジカによって農作物被害を直接受けていることもあり、野生ジカはいなくてもよいと考えており、この被害を「深刻な問題」と考えていた。また、野生ジカの有害駆除では、全体として

は、「現存頭数を把握してから行なうべきだ」が48%であり、「進んで行なうべきだ」が31%であり、いずれにしても有害駆除としてシカを射殺することに賛成する人は約80%を占めたことになる。その有害駆除のためのシカ牧場のあることは町民の大半が知っていたが、三陸町の主要な産業は水産業と農林業以外にないため、野生ジカの有効利用によって地域活性化を図ることに協力したい町民は多かった。

また、野生ジカの有効活用の事例についても論じた。

キーワード：キーワード：野生ジカ，農作物被害，住民意識，シカ牧場

謝 辞

本研究をまとめるに際し、調査当時、前三陸町農林課の方々から貴重な助言を賜った。また、関聡子さんはじめ研究室の専攻生にはアンケート調査や整理等で多大な協力をいただいた。ここに記して、深く謝意を表する次第である。

引用文献

- 細川吉晴・松本 崇・鍛冶亜樹 (1999) 中山間地域における野生動物による農作物被害への対策
1. 全国における農作物の鳥獣害実態と獣害防止柵，平成11年度農業土木学会中国四国支部研究発表講演要旨集，pp.125-127.
- 細川吉晴 (2011) 岩手県三陸町夏虫山高原における野生ジカ捕獲施設の施工。宮崎大学農学部研究報告，第57巻，39-48.
- 細川吉晴 (2012) 岩手県三陸町夏虫山高原における野生ジカ飼養施設の建設，宮崎大学農学部研究報告，第58巻，19-29.
- 北岡和彦・金古美輝夫・高宮立身 (2011) 囲いワナを用いたニホンジカ捕獲方法の検証，九州森林研究，No.64，161-162.
- エゾシカ協会 (2006) エゾシカ有効活用のガイドライン，<http://www.yezodeer.com/yukokatsuyo/yukokatsuyoguidline.html> [2012/8/15参照]
- エゾシカ協会 (2012) エゾシカ有効活用等調査団調査概要版，<http://www.yezodeer.com/yukokatsuyo/NZtour/NZchap1.html> [2012/8/15参照]
- エゾシカ食肉事業協同組合 (2012) エゾシカふぁんくらぶ，<http://yezodeer.net/yezodeer/index.htm> [2012/8/15参照]
- 岩手県 (2012) 第三次シカ保護管理計画(案)の概要，<http://www.pref.iwate.jp/~hp0316/yasei/public/3jisikakeikaku/3jisikagaiyou.pdf> [2012/8/15参照]
- 九州森林管理局 (2012) シカ被害対策の取組状況(捕獲技術の開発に向けた取組)，<http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/sidou/shika/shika.html> [2012/8/15参照]
- 熊本日日新聞 (2012) シカ捕獲業務検討会，2012年1月28日6面 記事
- 水上村役場 (1998) 鹿肉加工品を村の特産物に その名も「美味鹿(おいしか)」，農林水産物の流通加工対策・消費者対策の推進，熊本県水上村，農林漁業現地情報，http://www.toukei.maff.jp/genti/1998_01/98_016_13.html [2001/1/30参照]
- 南羽孝喜 (1995) 鹿の袋角から健康食品 新商品「鹿麗」でふるさと振興，農林水産物の流通加工対策・消費者対策の推進，岩手県三陸町，農林漁業現地情報，http://www.toukei.maff.jp/genti/1995_01/95_016_4.html [2001/1/30参照]
- 農林水産省生産局農業生産支援課鳥獣被害対策室 (2012) 全国の野生鳥獣類による農作物被害状況について(平成22年度) http://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/h_zyokyo2/h22/index.html [2012/8/15参照]
- 坂本龍虹 (1995) 「鹿牧場」で地域振興 鹿肉と温泉をセットに地域振興一，農山漁村の活性化，熊本県水俣市，農林漁業現地情報，http://www.toukei.maff.jp/genti/1995_06/95_064_20.html [2001/1/30参照]